

帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ!

戦旗・共産主義者同盟

戦旗

2月5日

5日、20日発行

413号

1部 100円

編集発行人 中森 昇

購読料 1部・20回 2600円
(郵送料含む)

戦旗社

東京都新宿区新宿5の2の9

コーポハビービルE1号

電話 03 (356) 2982

郵便 東京7-26110

2・22「加冠の儀」弾劾集会へ

狭山再審棄却弾劾!

強まる日帝の戦争策動に抗し、リムパツク粉碎に起て

全国の同志・友人諸君!
この二月から三月の政治過程においてわれわれが革命的階級的に対処し闘いぬくことは決定的に重大である。
ソ連軍のアフガン侵攻、宮永元陸将補のソ連スパイとしての摘発をよって、日帝大平は、反ソ気運を大きくつくりだそうとしている。インフレ・高物価に対する人民の不满を排外主義に向け、「ソ連脅威」を語り、軍備増強、海外派兵を正当化し、戦争への国民総動員をは



石川さんを一刻も早く年老いた御両親のもとへ
と決意を固める狭山全国委 (1・28 明治公園)

2.22

「浩宮加冠の儀」弾劾講演集会

講師 桑原 重夫氏
中山 武敏氏

午後6時 豊島区民センター4階

2.24

リムパツク粉碎現地総行動

午後一時 横須賀臨海公園

2・10 厚木基地抗議行動 (大和駅前)
2・11 日本原現地闘争

からんとしているのである。われわれは、ソ連スターリニストの大国主義的アフガン侵攻の反動性を暴き出さなければならぬ。しかし、それ以上に昨年来米帝によって進められた対ソ包囲網の形成、その急展開が何よりも第三世界の被抑圧民族人民に向けられていること、とりわけ八〇年代の資源の確保をねらっていることを弾劾し

ソ連のアフガン侵攻を弾劾し、カーター・ドクトリンの反革命性を徹底あばき出せ!

昨年十二月二十七日、中旬以来増強されてきたソ連軍がアフガニスタンの首都カブールで政府軍と交戦、撃破してハフィズラ・アミン首相を処刑し、ソ連亡命中のバブラク・カルマル(人民民主党パルチヤム派)を政権の座につけた。七三年の王制打倒から数えて四度目のクーデターであり、しかもソ連軍の直接介入として、昨年の中国・ベトナム・カンボジア戦争に続く、国際共産主義運動におけるきわめて否定的な事態が現出しているのである。

このような時、われわれに必要なのは、「スターリニスト革命」なる造語によって一切を解釈しきることでも、無条件に「労働者国家擁護」を叫ぶことでもない。事実を具体的に分析し、思想的にもスターリン主義を内在的に克服すること、そのような革命党・革命勢力を創出するべく奮闘することである。ともあれ、八〇年代を日本革命の前進とプロレタリア世界革命に向けて闘うわれわれにとり、少くともおさえておくべきことは以下の諸点である。

第一に、ソ連の軍事侵攻は「アフガニスタン革命の防衛」や前進をもたらすものではなく、それゆえ、徹底して弾劾しなければならぬということである。アフガニスタンは、古来「文明の十字路」といわれ、インド・中国・西アジアを結ぶ内陸交通の要衝として諸民族の侵入をうけ、十九世紀以来は英露帝国主義、さらに米ソ対立の戦場となってきた。加えて国土の七六%が砂漠と山岳であることから地域的孤立性が強く、内には複雑な民族・言語・構成と千近い部族社会をかかえ、外には近隣諸国に同一の民族が広範に存在するため民族自決をめぐる対立・紛争が絶えない。

総人口約二千万人のうち六百万人のパシュトゥン族は、キスタンに七百万人おり(パシュトゥン問題)、ウズベク族・トルクメン族はソ連邦内に同名の共和国があり、南部のバルチ族はパキスタン・イランとの各国境周辺地帯に在る(バルチスタン問題)という具合である。宗教は九九%がイスラム教で少数のハザール族を除いて全てスンニ派である。基本的に部族社会として成り立ち、「カブールを制する者、必ずしもアフガニスタンを制さず」と言われるこの国における革命は、「上からの近代化」「上からの革命」や、カブール政権のシグ替えによつては成功しえない。歴史的にみても、一九一九年独立以来、国家統一と西欧文化導入による改革を進めようとした国王が地方の部族勢力や宗教界の反発で退位あるいは暗殺され、また七三年のモハメド・ダウドによるクーデター後その対立は深まるばかりであった。ソ連の援助は殆んど政府借款であり、アフガニスタンの債務奴隷化

なければならぬ。まさにそこへの日帝の積極的加担としてのリムパックを粉砕すべく、八〇年代安保闘争の第一弾、二・二四に総決起せよ! リムパックと並行し、天皇の下への反革命統合をねらう「浩宮加冠の儀」粉砕、二・二二講演集会の圧倒的成功をかちとれ!

をもちしはしたが、部族社会にイスラム勢力の下に集約されている人民大衆の状態を変革しはしなかつたのである。七八年四月のクーデターで獄中から釈放された人民民主党タラキ政権が翌年一月土地改革に着手し、これに反対した宗教指導者百余人を逮捕したことで対立は決定的となった。折しもイランにおけるイスラム革命が進行し、米帝が新たな対ソ包囲網を形成しようとしていた。三月ヘラートでのイスラム暴動を転機として、イスラムゲリラは米・中の支援などもうけつつ全土二十九州のうち二十三・四州を制圧し、八月にはカブールを包囲し政府軍の寝返りが続くまでに事態は発展する。この危機のさ中、人民民主党軍事委員として軍内に力を蓄えていたアミンは、ソ連タラキのアミン排除計画を知り、九月十四日先制クーデターを敢行し、内にイスラムゲリラ、外にソ連軍の圧力を受け、十二月二十七日に向かつていくのである。

つまり、ソ連の対アフガニスタン政策は、人民大衆による革命への支援ではない。経済・軍事援助を通じたカブール政権の親ソ化とそれによる「上からの革命」は、だから逆に人民大衆を部族社会にイスラム勢力のもとに糾集させ、親ソ政権の危機を招き、それを弥縫するものとして今回の軍事侵攻はあつたのである。

第二に、今回の軍事侵攻は、ソ連スターリニストの、プロレタリア国際主義とは全く無縁な大国主義的利害、思惑にもとづく行動だということである。前述したごとくソ連の対アフガン政策は、決してアフガニスタン人民自身の革命への支援ではなかつた。カブール政権の親ソ化は、実はソ連「一国社会主義」防衛のため、米帝にイラン・パキスタンに対する緩衝地帯、さらにはソ連圏としての確保をこそ目的としていたのである。

ところが、イラン革命としてのイスラムパワリーの爆発は、それまで底流としてあつた反政府イスラム勢力の動きを活発化させ、米帝の対ソまき返しも相まって、この緩衝地帯をむしろ火薬庫としてしまったのである。加えて、ソ連邦のアフガニスタンに接するウズベク・トルクメン、イランに接するアゼルバイジャンなどの共和国はイスラム圏に属している。現在はソ連総人口の二割、約五千万人がイスラム圏に属するわけであるが出生率が高く、ゆくゆくは過半を占めるだろうといわれている。イランに続いてアフガニスタ

ンがイスラム共和国化すれば、遅かれ早かれこれらの共和国に飛び火しソ連邦に重大な亀裂を生じさせていく可能性をはらんでいるわけである。もし「防衛」ということが語られるとすれば、このような意味におけるソ連「一国社会主義」の防衛であつてそれ以外ではない。むしろより着目しなければならぬのはソ連スターリニストの中東原油(輸出可能な世界の石油の三分の一)への思惑である。

ソ連は現在世界最大の産油国であり、東欧諸国へ供給している。この石油がソ連の東欧への影響力ともなっているのであるが、シベリア開発の遅れもあつて八〇年代にソ連原油は減産にむかうともいわれ、ソ連自体のエネルギー消費増大と合わせて、そこに重大な困難が生じようとしている。すでに昨年の第32回エネコン総会は、エネルギー・燃料・原料長期計画を決定し、チエコ・ハンガリーなどでは石油関連製品が大幅に値上げされた。この迫りくる八〇年代石油危機をひかえてソ連はこのかん形成されてきた中東・ペルシヤ湾への戦略態勢を維持、できれば強化しようとしているのである。アフガニスタンはその南端からインド洋まで約四五〇キロという戦略的重要地点にある。そこへの軍事侵攻、エメン、エチオピアへの援助や対イラン・中東への懐柔策は、まさにかかる大国主義的思惑にもとづいてなされているのである。従つて、ソ連軍のアフガン侵攻はいかなる意味においても正当化しえず、国際共産主義運動の前進を阻害するものとして断罪されなければならず、また必ずやそうならざるをえない運命にあることをわれわれは暴露していかなければならない。



第三に、ソ連軍のアフガン侵攻は昨年来米帝が進めてきた対ソ包囲網の形成に対する誤る反撃であり、これを好機として帝国主義は第三世界をもだきこみ、各国革命運動への弾圧的介入、中東・朝鮮への戦争的まき返しを一挙に促進しようとしていることが確認されなければならない。

アメリカ帝国主義は七九年に入ってNATO軍増強計画、緊急展開部隊(RDF)の創設、米海軍中東機動部隊の増強、中国をも含む環太平洋諸国との軍事連携強化を進めてきた。とりわけ日本との間では、山下前防衛庁長官の訪韓「訪米を通じ、フォートレス・ゲールへの自衛隊員参加や日米合同演習の活発化がなされてきた。キューバや色丹島のソ連軍増強、核・通常兵器が米帝を上回りつつあるというキャンペーンはこれらを正当化するためのものであつた。それは、ベトナム以来後退を続けてきた米帝が、イラン・ニカラグア・韓国と相次ぐ第三世界人民の決起に対抗して「世界の憲兵」に舞いもどる前奏曲であつた。

1・23カーター・ドクトリン、1・29ブライウン国防報告はその集大成である。
 カーターは、かつて米帝がベトナムに五五万人もの軍隊を投入し、あるいはチリで合法的なアジェンデ政権を倒したことを忘れたかのようにイラン・アフガンの事態を弾劾した。そして中東原油への執着を露わに、①外部勢力のペルシア湾支配は米国の死活的利害への攻撃とみなし軍力で阻止する、②中東・南アジア諸国との協力的安保体制の形成、③選抜徴兵制の復活、④CIAの強化を打ち出した。

すでに米軍力はその方向で展開しはじめている。十二月末には、米空軍機がエジプトに飛び、合同演習や超高度偵察機SR71のズバイ飛行も行われている。米海軍は、インド洋・ペルシア湾方面に第七艦隊のキティホーク、ミッドウェーが待機し、一月四日、強襲艦オキナワを中心とする六隻の上陸機動部隊が海兵隊を満載して米本土を出航するなど統々増強されている。また、ケニア、オーストラリアの恒常的基地使用、インド洋のジェゴガルシア島海軍基地の拡張や、中東軍司令部の新設を検討中である。さらに、RDFのため九〇億ドルを投じ、今後二年間にパキスタン四億ドル、エジプト十一億ドルの援助などが決定された。
 これは直面するアフガン問題や年末大統領選を考慮して、ということにとどまらない。

自衛隊の海外派兵、中東・朝鮮への戦争的まき返しをはかるリムパックスを粉砕せよ!

自衛隊の海外派兵Ⅱ リムパックスを粉砕せよ!

今月末から三月にかけて中部太平洋ハワイ沖で環太平洋合同軍事演習Ⅱリムパックス80が行われようとしている。七一年以来かぞえて七回目、日本自衛隊が参加するのは初めてである。すでに一月二十五日、対潜ヘリ搭載艦「ひえい」、最新鋭のミサイル搭載艦「あまつかぜ」が横須賀を出航し、二月十、十一日には厚木から対潜哨戒機P2J八機が発する予定で、自衛隊は日米合同演習後、リムパックスに参加する予定である。

今回の演習は、しかしこれまでの演習の単なる繰り返しではないし、自衛隊の参加は、「これまでのハワイでの日米合同訓練の延長」でもない。リムパックスこそは、カーター・ドクトリンの具体化として、中東・インド洋への米軍力集中を実際に防護しつつ、太平洋の軍事的穴埋めを行うものであり、そこへの日帝自衛隊の参加はまさに海外派兵そのものとしてなされているのである。
 わが全党全軍は、単なる軍事演習にとどまらない、直接的に中東・第三世界人民への敵対をなすリムパックス、そこへの自衛隊の参戦を断固粉砕すべく、二・二四の総力決起を実現しなければならない。

環太平洋軍事同盟ⅡPATOの実体化を阻止せよ!

二・二四リムパックス粉砕闘争をたたかうにあたってわれわれは、第一に、リムパックスが対ソ包圍網めざすJANZUS、ひいては環

「戦争のアジア人化をめざした六九年ニクソン・ドクトリンからの明らかな転換である。米帝は再び世界の憲兵たらんとしているのだ。しかし、米帝一国でそれが不可能なのは言うまでもない。かくして「米国・西欧・日本との共同計画努力(国防報告)」を軸とする資本主義国の総動員がはかられる。つまり、米軍は機動打撃力を担当し他はそれを補充・防衛する機能を分担するのである。

その矛先はソ連にだけ向けられているのではない。むしろより多く帝国主義や抑圧者からの解放を求める人民に向けられており、中東(より広くは第三世界)をあくまで石油(資源)供給国としておくための軍事的保障というまったくもって反革命的で帝国主義的野望に貫かれていのである。これこそがカーター・ドクトリンの本質なのだ。
 だが、かつて米帝がベトナムで敗れたとすれば、今度は米帝を中心とした欧・日帝国主義とその同盟者たち総体が、第三世界人民の歴史の総決起の中で死の淵に叩き落とされていく以外ない。人民に依拠しえないソ連スターリニストの対外政策はますます大帝国主義と軍事色を強め「解放者」の仮面をはがされていくであろう。このような八〇年代においてわれわれは、自らの解放を求め帝国主義支配を打ち破る第三世界人民に断固連帯し、侵略反革命を蜂起・内戦に転化する革命党・党命勢力への飛躍をかちとらうではないか。

「環太平洋軍事同盟(PATO)の具体化であり、それへの日本帝国主義の実体的参加であること」を知らなければならない。
 リムパックスはこれまで、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの四国を中心として、対潜攻撃、対空射撃、水上打撃戦、電子戦などの高度な戦技演習を重ねてきた。一昨年は、米原子力空母エンタープライズや原子力潜水艦など艦艇約四〇隻、航空機二五〇機、兵員二万五千人が参加した。目的は、有事のさい、これらの国の海上交通を確保するため」とされ、中部太平洋を東西に横断する長大な海上交通路を対象としている。リムパックスが始まった七一年といえ、二

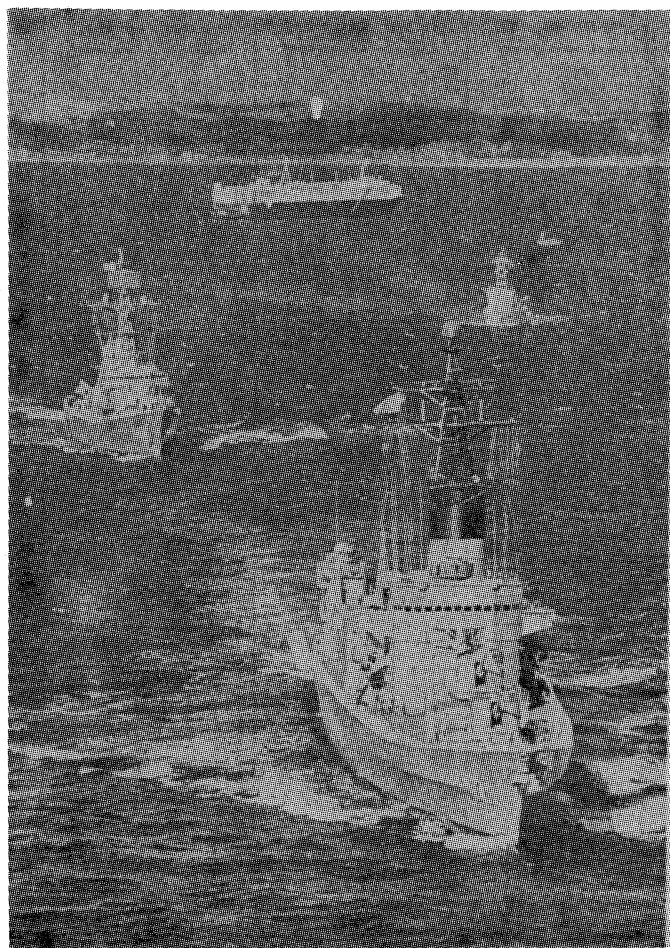
クソン・ドクトリンにもとづく太平洋米軍撤退の時期である。六六年当時約七〇万人の同米軍は今では一七万人にまで減少した。このかんの欠除を補うべくリムパックスはなされてきた。そこへさらに、カーター・ドクトリンに従いこの米軍が中東方面へ出動するならばより多くの国の動員が必要になってくる。その第一が日本であり、J(日本)・ANZUS同盟への道である。

昨年五月来日したハイワード米海軍作戦部長は「ソ連極東海軍に対抗するため、日、豪、ニュージーランドとの間で協力関係を発展させる」と語っている。この時期、三月には米太平洋艦隊司令官から大賀海軍幕長へリムパックス参加の意向打診があり、四月大平が了承、五月には高品前統幕議長が豪州、ニュージーランドを訪問し、両国軍首脳とこの件について話し合っている。さらに一月、大平はオセアニア三国訪問にさいして「多角的協力関係の発展」を確認したが、オーストラリアでは対日閣僚理事会によって日本との軍事協力の必要性を強調する日豪関係報告書がつけられていたのである。この経緯にてらしてみれば、自衛隊のリムパックス参加は、単なる「ハワイでの日米合同訓練の延長」ではまったくない。まさにJANZUS同盟Ⅱ太平洋統合軍をめざしていることは明らかである。

しかも、米国防報告において日本は「極東のかなめ石」と位置づけられ、「日本、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランド、韓国との同盟関係の不可欠性」が強調されている。アメリカ帝国主義は、米日・米比・ANZUS・米韓条約を基礎とし、ひいてはASEANをも加えたPATOの具体化によって太平洋の軍力を補い、とりわけ日帝の経済力をも生かしつつ、カーター戦略の展開をはからんとしているのである。
 日帝大平の環太平洋連帯構想の本質もまたここにある。われわれは、まさにこのような米帝のたくらみ、日帝の八〇年代軍事外交路線に絶対決するものとして、リムパックス粉砕への戦略的決起をかちとらなければならない。

中東出撃部隊を護衛するリムパックスへの自衛隊参加を許すな!

第二に、サムパックスは、帝国主義が中部太平洋横断航路を支配し、中東(朝鮮)への緊急展開部隊の出撃ルートおよび石油輸送ルート



1月25日 リムパックス参加のために横須賀を出港した自衛艦「ひえい」(手前)と「あまつかぜ」

旗 戦

を確保せんとするものである。いや、まさに現在、そして合同演習中も米本土から中東に向けて軍隊が出動しつつある。アフガンに侵襲したソ連が緊迫性をもってこれを偵察しているのはいうまでもない。実戦さながらの総合演習(大賀幕僚長)どころか実戦そのものとしてなされる可能性をはらんでいるのである。

すなわち第三に、自衛隊のリムパックへの参加は、日帝の海外派兵への道を開くものである。その第一歩である。政府・防衛庁は、十二月十一日、「防衛庁設置法五条21号―所掌事務の遂行に必要な教育訓練の範囲でならいかなる国との共同訓練も可能」との見解を発表した。韓国だろうとイスラエルだろうと構わないというのである。また、リムパックでは米艦艇を護衛する任務にもつくという。

さらに政府筋によれば、栗栖発言「超法規的行動」の承認が国会にもなされる予定である。その内容は、奇襲をうけた場合、総理大臣の防衛出動命令が出る前であっても、その場かぎりの武器使用は自衛隊員の当然の「職務行為」である、また退去命令に従わない領域領海侵犯に対する武器使用は「国際法上わが国の自衛権の正当な行使」というものである。

この両者を結びつければ、米・韓などと合同演習中これらの国が戦争をはじめた場合、日本は自動参戦していくことが認められるわけである。

こうした既成事実の積み上げは、硫黄島の不沈空母化やP3C、F15、E2C導入など装備の強化とともに、七八年「日米防衛協力指針」にもつき八〇年代における朝鮮・中東への出兵をめざしてなされているのである。

アジア人民への血債にかけ、帝国主義の侵略反革命をうち破る総決起かちとれ！
第四に、われわれは今日、とりわけソ連軍のアフガン侵襲によって安保・自衛隊は認の風潮が強まり、他方では単なる違憲違法論でしか抗議しえない社共の現実をみずえ、アジア人民への歴史的血債にかけて日帝の侵略反革命をうち破るべく総決起しなければならぬ。

狭山臨戦体制を打ち固め、戦争と差別を つよめる「浩宮加冠の儀」 講演集會に結集せよ！

情勢がますます「革命と戦争」の時代として展開しつつある今日、日帝大平は、実質的な海外派兵の第一歩リムパックと期を合わせることのように天皇賛美の攻撃をかけようとしている。天皇ヒロヒトの長孫、浩宮徳仁(ひろのみや・なるひと)の成年式、「加冠(かかみ)の儀」がそれである。他方、このかん激発する差別事件の頂点として、無実の部落民石川一雄氏への再審棄却が、東京高裁四ツ谷によって画策されているのである。

帝国主義天皇制攻撃と対決し、「加冠の儀」を粉砕せよ！

このような情勢のもとで二・二二講演集會をかちとる意義は、第一に、戦争と差別をつよめる「浩宮加冠の儀」を弾劾し、国民総動員

「革命と戦争」の八〇年代、日本帝国主義は資源の大半を依存する中東、南太平洋への影響力を強め、シーレーンを確保し、帝国主義として延命していくためにリムパックへの参加を決定したのである。法律も政治・軍事体制も、「一切その方向に向かっている」。八〇年代の連合政権「なるものは、そこへの既成野党の動員をはかるものとしてあったのである。

このような時代に、個々の現実に対する違憲違法論でたち向かえるであろうか？ 支配階級がこれまで通り支配しえなくなり、人民も時代の転変を感じつつある時、かつての「平和と民主主義」に依拠することができなくなるか？

われわれは、できないと考える。いな、それは反動的ですらある。戦後日本の高度成長や「平和と民主主義」は、第三世界からの資源・労働の収奪、そこでの戒厳令政治、血の弾圧の上に成り立っていた。今やその基盤は、第三世界人民の歴史的総決起、血のじむ闘いによって掘り崩されたのである。それをなおかつ維持しようとする者は、帝国主義の同調者となる以外ない。

朴体制の自壊をつくりだしながらも、なお戒厳令政治のもとで苦闘する韓国民衆の血叫びが聞こえないのか。とりわけ、朴親衛隊ともいべき全斗煥の肅軍クーデターは、金芝河を獄死の淵にさらし、これまで拷問されたこともなかった反体制派の長老咸錫憲氏さえ拷問されるという、きわめて厳しい現実のもとで、朴なき朴体制の打倒にむけた困難だが勇気あるたたかいが続けられているのである。フィリピンやインドネシアにおいても、マルコス・スハルト独裁とのたたかいが展開されている。

これらの独裁者を支えている者こそ日本帝国主義であり、またそのことによつて日帝は存立してきたのである。より歴史的にみるならば、日帝百年の歴史は、まさにアジア人民への侵略・抑圧・暴虐の歴史であった。そしていま、中東までも拡大しつつあるのだ。われわれは、今こそ、アジア人民への歴史的な血債にかけて、被抑圧民族人民と連帯し、日帝のアジア侵略反革命、朝鮮・中東への戦争策動を打ち破るべくたちあがらなければならない。

これら八〇年代の帝国主義天皇制攻撃を粉砕すべく決起することにある。
二月二十三日、浩宮が二〇歳となるのに伴い、史上はじめて行われる皇長孫の成年式は、一月二日決定された大綱によれば次のようなものである。

- ①二十三日朝、賜冠の儀。冠を天皇から受けとった侍従が東宮御所を訪れ浩宮にわたす。
- ②午前十時、加冠の儀。両親、天皇・皇后の前で、未成年の装束をつけ「加冠の座」に着席した浩宮に徳川侍従次長がこの冠をかぶせたのち、儀装馬車で宮中三殿を参拝する。
- ③午後、天皇が浩宮に大勲位菊花大綬章を手渡す。天皇家の男は、成年に達したというそれだけで最高の勲位を手に入れるのである。
- ④二十五日、皇太子夫妻が大平はじめ全閣僚、衆参両院議長や最高裁長官など立法・司

法のトップを招いて宴会を行う。夜は皇族・縁故者による宴会。さらに二十六日、浩宮の恩師、学友をあつめて東宮御所で宴会を行う。
⑤二月末〜三月初。浩宮は伊勢神宮、神武天皇陵、多摩陵を参拝し成年の報告をする。付け加えれば、これをもって浩宮の結婚相手は正式に捜し始められることになる。

法的には何の根拠もない皇長孫の成年式に一千万円の大金を投じ、「加冠の儀」をテレビの生中継で全国の茶の間に送りこむのはきわめて政治的なもくろみによつて行われている。高度成長、従つてそのごく一部を労働者人民に分け与えることで政治支配しえる時代がおわった今、日帝大平は「民族の伝統と文化を生かした日本型福祉社会の建設(施政方針)を提唱し、家庭の重要性を強調した。『万世一系』の天皇、古式にのっとりた長孫の成年祝賀の目的はここにある。つまり天皇はGNP神話に代わる八〇年代の新たな国民統合軸として政治過程に登場しているのだ。天皇在位五十年式典に続く元号法制化、君が代の「国歌」化、靖国法案や「殉難者」としての戦犯記念碑建立と相次ぐ帝国主義天皇制攻撃は、家族・国家を守ることを称して侵略反革命戦争への国民総動員をねらっているのである。

他方、「貴族あれば賤民あり」と言われるように、この天皇賛美と神聖化は部落民、在日朝鮮人民などへの差別を強めざるをえない。そして差別意識の助長は人民を相互に分断しブルジョア支配の延命を可能とする。そこからはみ出た者へは、官僚的警察的軍隊の権力の赤裸々な暴力のみが加えられることを許してしまうのである。

日帝百年の侵略、抑圧、暴虐の歴史、そこに動員されていった日本人民の痛苦な歴史をとらえ返し、加冠の儀を出発点とする八〇年代の帝国主義天皇制攻撃を粉砕すべく決起しようではないか。

激発する部落差別の頂点、再審棄却絶対阻止！

第二に、一・二八をひきつぎ、狭山臨戦体制を打ち固め、棄却絶対阻止、石川さん奪還をめざしてたたかい抜くことである。

一・二八狭山再審決戦は、日共の敵対をはねのけ、部落の子供たち十万人が同盟休校に突入し、全国で六〇万の決起をかちとった。われわれはこの部落大衆のたたかい、獄死攻撃と対決している石川氏、御両親に心底応えるべく、また日帝の朝鮮出兵策動、差別・抑圧攻撃と対決する八〇年闘争の第一弾として全国から総決起したたたかいぬいた。

高裁四ツ谷はしかし、脅迫状の日付問題など、すでに石川氏の無実が明々白々であるにもかかわらず、事実調べすらなそうとしない。七四年、高裁寺尾が現地調査などの決定を反古にし、無期懲役判決を下したのも、事実を調べれば有罪としないからであった。ましてや「らくだが針の穴を通るより難しい」といわれる再審である。

しかも、決定的に重大なことは、石川氏への棄却、死刑にも等しい攻撃が、このかん激発する差別事件の頂点としてなされんとしていることである。

すなわち、世界宗教者会議において曹洞宗の町田宗夫が「日本に部落差別はない。部落解放を理由に騒ぐ者がいるだけ」と発言し、報告書から部落問題を削除させるという差別的暴挙を行った。また、早稲田大学の永井講師は講義中「部落ではキチガイが多い。結婚するときは調べるように」という許し難い差

リムパック粉碎第一波 1.20横須賀基地へ抗議闘争



別発言を行っている。差別ハガキや差別落書きもあとを絶たず、差別事件が全国で激発し、不況・インフレなどへの不満の口とされているのである。

狭山再審棄却は、まさにその頂点として無実の部落民に極悪犯罪者の烙印を押し、部落差別を助長するものとして画策されているのであり、それは二一三月にも予想されるという決定的正念場にさしかかっている。

石川氏の獄中での苦闘の年月は、浩宮がぬくぬくと育ってきた年月にも匹敵する。ある日突然「楽しかるべき青春」を奪い去られ、病床にふせる親を見舞うことさえ許されない苛酷な現実、これを生みだしたのもこそ部落差別であり、その対極に天皇家はあつたのだ。

石川氏の血叫び、「部落解放の礎になる」という壮絶な決意をうけとめきり、棄却絶対阻止をかちとるべく決起しようではないか。

第三に、自衛隊の海外派兵「リムパック」による朝鮮・中東への戦争策動と対決するものとしてかちとることである。

われわれは昨年二・一二以来、戦争と差別を許さない狭山闘争の前進をめざし、全国実委の実体化をおし進めてきた。

浩宮成年式が行われる二月下旬〜三月、日本自衛隊は実戦そのものともいふべきリムパックに参加し、海外派兵への道を開こうとしている。ソ連軍のアフガン侵攻、自衛隊スパイ摘発事件によって「ソ連の脅威」を最大限にあり、軍備増強、防衛二法改悪への大きな流れをつくりだし侵略反革命体制を築こうとしているのである。

われわれはかかる日本帝国主義の総路線に革命的、階級的に対処しなければならぬ。ソ連スターリニストの大国主義的アフガン侵攻を弾劾し、これを口実に急展開する対ソ包囲網、そこへの日帝の参加としてのリムパックへの自衛隊派遣、中東・朝鮮への戦争策動を打ち破るべく、二・二二集会の圧倒的結集をかちとらなければならないのである。

全国の同志、友人諸君！

七〇年安保を前にしての第二次ブントの分裂、そして戦旗派としてのわれわれの再出発以来十年、アゲチ分派以後七年の歳月が流れようとしている。

われわれはこの間、七四年七・七猛省集会において日本における革命党の思想的立場をうち固め、七五年激闘の三ヵ月、七六年天皇在位五十年式典粉碎、七七年鉄塔決戦を経て七八年開港阻止一三・二六戦闘の一翼を担い、さらに昨年末、十万署名運動の巨大な爆発を実現してきた。

いま必要なことは、その成果をしつかりと政治的思想的に打ち固め、この二一三月の政治過程に階級的に対処しつつ、二期阻止、廃港戦取の五・二〇大人民決起へ向けまなじりを決してたたかい抜くことである。

八〇年代の初頭にあたり、われわれは組織名を「戦旗・共産主義者同盟」と改称することを決定した。戦旗派の一分派ではなく、共産同の一分派として、あくまでも第三次ブント建設をめざし、全人民の勝利に奮闘する決意である。団結をうち固め、「革命と戦争」の八〇年代をたたかいぬく強固な意志の結集をかちとろう。

階級闘争のスターリン主義的歪曲を克服し、帝国主義の侵略反革命を蜂起・内戦に転化する革命党・革命勢力への飛躍をかちとれ！

二・二二浩宮加冠の儀弾劾、二・二四リムパック粉碎へ総決起せよ！

お知らせ

同盟の名称、並びに「戦旗」が他と紛らわしいため、名称と発行人を下記のとおり改めました。

戦旗・共産主義者同盟
「戦旗」発行人 中森昇

一月二〇日、横須賀臨海公園で「海上自衛隊の『リムパック』参加に反対する行動実行委員会」主催の「さあデモだ！手に手にプラカード、旗により、約百名の労働者、学生、市民の参加でかちとられ、リムパック粉碎に向けた第一歩が踏みだされた。

午後一時、司会者が開会を宣言し、集会は始まった。基調提起は、ヨコスカ市民グループによって行われ、「海外派兵に向けたリムパックを許すな！一・二五出航を海上で阻止せよ！」と力強く訴えられた。続いて、住友重工反合理化闘争委員会、日韓連帯神奈川民衆会議、三浦地区解放教育研究会等より、それぞれの立場から自衛隊の戦争策動と対決するという決意表明が行なわれた。そして集会の最後に海上自衛隊横須賀総監部への抗議声明が読みあげられた。

横須賀港に接した会場からは二五日出港する「ひえい」が見える。

集会は、いやがおうにも盛り上がり、参加者の怒りは燃えあがる。さあデモだ！手に手にプラカード、旗を持ち、赤旗を持ったデモ隊は海上自衛隊横須賀基地へと向かった。宣伝カーからは、自衛隊員へ「人民へ銃口を向けるリムパックに参加するな」とアピールが寄せられ、代表団により、総監部に抗議声明文が渡された。

次は米軍基地だ！デモ隊は折り返して米軍基地正門前に進撃する。「米軍はアジアから出て行け！ミッドウェイ・ゴッホーム！」怒りのシュプレヒコールは、横須賀の街に響きわたる。英語のコールは米軍兵士に訴える。

抗議行動の後、デモ隊は繁華街通り、横須賀中央駅を経て、電話局前で総括集会が行なわれ解散し、闘争を終えていった。

(一〇頁より続く)

加つて富塚は「指名解雇を認めるような組合組合ではない」と言った。しかし、現にいま資本は、あらゆる所で指名解雇攻撃に出してきた。そして口先きではなくこれとたたかうことが問われている。

沖電・全通・全造船の労働者に向けられた攻撃は、他の労働者階級への攻撃の先づきのだ。「賃金が解雇か」という資本のどろり喝の前に、春闘連敗をかさねてきた既成指導部は、今また首切り攻撃を前にたたかわずして屈服の道を歩みはじめた。

労戦統一の旗の下にむらがるダラ幹どもの姿は、下部の戦闘的労働者のたたかいは敵に売りわたすことによりヌエ的に延命しようとするものであり、断じて許すことはできない。

たしかにこの労戦統一は、たたかう者の統

一ではない以上勝利の展望もバラ色の未来も労働者に保障するものではないことは労働貴族どもも認めている。だがしかし一たび作りあげられたものは独自の論理をもって動きはじめ。

「統一」の名の下に戦闘的労働運動の切り捨てが行われ、「統一」の名の下に下部労働者のエネルギーが押えこまれ、日帝のレッドパージに手をかすことが行われる以外ない。

われわれは、だがしかしこの反動的労戦統一が、戦闘的労働者のたたかうエネルギーに依拠したものではない(依拠しえない)ことを見ぬかなければならない。極反動的佐世保重工労愛会(同盟)ですら、下部の突きあげの前はストをもって立たざるをえないのだ。

三里塚処分に抗してたたかう動労千葉、全通・電通の仲間、破産攻撃とたたかう全金田中、指名解雇に断固たる反撃ののろしを上げた沖電・全造船の仲間とともに戦闘的労働者

のたたかいは作り上げ、反動的労戦統一のものくろみを打ち砕くのではない。

以上の任務は、いずれも既成指導部がネグレクトしてきた。敵の攻撃の本質を意識的に隠蔽し、労働者階級の革命的魂をくもらせてブルジョアジーの軍門に屈服することをもって延命をはかる既成指導部と、既成労働運動をつき破るたたかいこそが、八〇年代における労働者階級の任務であり、このことは、戦闘的労働者にとってさけることはできない。

すでに今、八〇春闘において、「短期決戦」の名の下に、ストなし収拾の逃げこみもくまらまれている。われわれは戦争と差別を許さない革命的労働者の潮流を創出することによってこれにたえねばならない。

八〇春闘の爆発を突破口に、八〇年代革命的労働運動の創出をかけ、総決起せよ！

盟休10万、全国60万の決起で

再審決戦の正念場を闘いぬく

1・28 狭山

棄却許さぬ万全の態勢で石川氏奪還かちとれ

一・二八狭山再審決戦は、十万人の盟休、全国六十万決起という巨額な爆発をかちとった。明治公園には部落大衆、支援共闘の諸団体、個人など九千人が結集し、ふりしきる雨の中、獄中の石川氏を一刻も早く奪還する熱意に燃えて再審要求のデモを貫徹した。

戦争と差別を許さぬ

80年代狭山闘争の前進を

午後三時すぎ、狭山全国実委の独自集会が始まった。

「部落差別の激発、その頂点としての再審棄却を阻止する正念場をたたかぬ」と事務局長が提起したのち、全国労共闘が発言に立った。

労共闘の同志は、アフガン危機で強まる中東・朝鮮への戦争策動と対決し再審決戦に勝利する決意と八〇年闘争の方向を訴えた。

続いて狭山現地活動班から病床にふせり石川氏の帰りを待つリイさん(母)の伝言が紹介された。「あす精密検査なので集会にいけ

ないが、みなさんよろしく」とこの訴えに誰もが心を熱くし、一刻も早く石川氏を奪還しなければ誓ったのである。

さらに、神奈川の部落解放県北懇談会より連帯のあいさつを受け、実委の各構成団体の決意表明ののち、解放同盟の前段集会に集中していった。

「石川の命わが命」と

全国十万人の盟休闘争

午後五時、野本中執の司会で集会が始まる。

あいさつに立った松井委員長は、「最後の正念場としてたたかう」決意をのべ、続いて中央闘争本部・西岡事務局長の報告がなされる。

西岡氏は、まず十九都府県約十万人の児童が部落民宣言を行い同盟休校を貫徹、大人は職場生産点で決起し、全国で老壮青少約六十万人がたちあがったことを報告する。「多くの労働者市民がこれに呼応しているが、日共・全解連のみは『教育破壊』といて敵対した」

ことを弾劾し、三・一一内田差別判決糾弾、再審決戦への総決起を訴え、万場の拍手で確認された。

次に関東ブロックの各県連の決意表明に入った。

五つの小学校、二つの中学校で盟休を実現した埼玉県連。東京都連からは盟休をたたかった子供会より「石川にいちやんととりもどそう」と感動的な訴えがなされる。

「いかなる困難も克服してたたかぬ」と群馬県連。千葉県連は「千葉刑をかかえ、狭山を軸に棄却を許さぬたたかぬの組織に全力をあげている」との報告がなされる。

「石川の命わが命」として再審決戦に立ちあがり解放をめざす部落大衆の発言は全参加者の胸をうち、勝利への決意をいっそう固いものとしていった。

最後に三里塚反対同盟より、石毛常吉、市東東市の両氏が発言に立つ。石毛氏は「二期阻止・廃港」を訴え、市東氏は「上告棄却の日を忘れることができない」として共にたたかぬ決意を明らかにした。

困難うち破り 再審をかちとろう!

午後六時すぎ、差別裁判打ち砕こう! の大合唱で解放同盟、中央共闘、東京共闘共催の統一集会が始まる。

まず長野県連の子供会より盟休闘争の報告がなされた。「石川さんの苦しみを考えがねばる」との決意は万場の感銘をよび、わきあが

る拍手で確認された。

西岡氏の基調報告に続いて狭山弁護団東京事務局長の中山武敏氏が報告にたつ。

四ツ谷は再審の流れに逆行する態度をとっており、気をゆるめずたたかなければならぬ。全証拠を開示させるたたかぬも重要だ。これにより無実はさらに明白にできる。弁護団も全力でたたかぬを抜く。全員が心をひきしめ、決意をあらたにする。

東京の子供会の報告に続き、石川氏のアピール(別掲)が読みあげられ「石にかじりついて無罪をかちとれ」との決意をうけ、全部落大衆・労働者階級の総力を結集して厚い壁をうち破る「集会決議が全体のものとして万雷の拍手で確認された。

そして、強まる雨をもともせず代々木公園へ向けたデモに移っていったのである。

全国の同志諸君! われわれは、一・二八闘争を第一に、一二月にも予想される高裁四ツ谷の棄却を絶対阻止すべく、再審決戦の正念場としてたたかぬいた。第二に、獄死攻撃と日夜対決している石川氏、御両親、十万人の同盟休校、休業でたたかう部落大衆に心え全国から総決起した。第三に、日帝の朝鮮出兵策動、差別・抑圧攻撃と対決する八〇年闘争の第一弾としてたたかぬ抜いたのである。

さらに、再審棄却絶対阻止に向け三・一一く五・二三への大きなうねりをつくりだそう!

1・17〜29

高裁四ツ谷に再審を迫る

一・二八を頂点として解放同盟の各地方ブロックは東京高裁要請行動を貫徹し、全国実委も再審勝利の決意をこめて参加した。

一月十七日、関東ブロックが口火をきった。集会場の日比谷公園には機動隊のものしい警備をはねのけて約五百名の部落大衆、労働者、学生が結集する。埼玉県連・野本委員長は、関東ブロックは千葉刑包囲など大衆的実力闘争

の成果をもって八〇年第一歩の本闘争にたちあがった。全力で一・二八へと熱烈に訴え、要請団は弾圧をはね返して第四刑事部に七名の代表を送りこんだ。

さらに、二十二日、中国・四国、二十四日近畿・東海、二十九日九州の各ブロックが波状的に要請行動をたたかぬき、四ツ谷に再審を迫っていった。



東京明治公園には9000の部落大衆、労学市民が決起した(1・28)

私は石にかじりついても無罪をかちとる

石川 一雄

「石川の生命は我が生命」とし、狭山再審闘争勝利貫徹へ全組織の総力をあげて闘っておられる同盟員ならびに解同と共闘下にある諸労働団体の皆さま、そしてここにあって常に変わらぬ御尽力下さっておられる全ての各位様へ千葉刑に幽閉されている石川一雄より感謝のお言葉を届けたします。

電文アピールで申し訳ありませんが、本日はお忙しい中を本趣旨に賛同、共鳴し、遠近より本決起集会に御参加下さり誠に御苦勞様に存じます。

特に今日は小・中学生の弟妹たちが、石川兄ちゃんを助ける為と同盟休校をうって闘って下さることをうかがい知り、感激

の涙はとまりません。同盟休校の実現化にあたり御両親をはじめ、教育労働者の御理解が得られずしてかなえられぬことは重々承知しておりますが、尊い学業を放棄して闘って下さる弟妹たちのその姿勢に私は身を切られるおもいで私の胸ははりさけんばかりであります。

おそらく皆さん方がはらって下さる犠牲に対し、私はどんなつぐないもできないでしょうが、でも私はその恩返しとして生涯解放の為に捧げ、そして部落解放のいしずえになりたいと無罪放免後の真の進路を固めているのです。それには当面の闘いを勝ちとらねばならず、しかも部落解放闘争の前進と完全解放へ

戸村遺作展によせて

ヨシダヨシエ

三里塚闘争の陣頭に常に立ち、許しがたい国家権力に抗して、土地を奪われた農民の怒りを組織する闘いのなから、日本全土はいわずもがな、地上のすべての被抑圧者を解放する闘いの展望にまで拡げていった故戸村

彼は少年期から、農民や漁民などをはじめ身近な題材を求めて油彩やスケッチを、おびただしく描いてきたが、それは若者らしい抒情と反抗に彩られていた。そして(戦争協力画)が、日本の美術界をおおっていた時代は、その趨勢に抗して、暗い内部凝視の眼がするどくなる。

戦後、家業の農機具製作などから鉄熔接の技術を身につけて、鉄彫刻をてがげはじめるが、それは戦中の内的凝視の世界を客

「十一年連続値上げ阻止」を合い言葉とする東海大学費闘争は、ついに学費の一部―授業料の凍結を

東海大で学費闘争が爆発

授業料の凍結かちとる

「十一年連続値上げ阻止」を合い言葉とする東海大学費闘争は、ついに学費の一部―授業料の凍結を

公判日程

- 2月7日 8ゲート2G、午後1時 東京地裁(弁護側証人調べ)
- 12日 五・二〇3G 午前10時 東京地裁(弁護側証人調べ)
- 13日 管制塔 午前10時 東京地裁
- 14日 三月要塞(刑事二部) 午前10時 千葉地裁
- 18日 三月要塞(刑事一部) 午前10時 千葉地裁
- 25日 五・二〇2G 午前10時 東京地裁
- 同日 8ゲート3G 午前10時 東京地裁
- 26日 管制塔 午前10時 東京地裁

の展望を切りひらく意味においても狭山再審闘争勝利が重要である以上、まさに私は石にかじりついても無罪を勝ちとらねばならない訳であります。

とはいうものの司法の反動化の現状では、狭山再審勝利は容易ではあらず、ゆえに各位に今後東京高裁をゆり動かす闘いを敢行してほしく、声を大にして訴え、お願いするものであります。多分この一・二ヵ月が勝敗の分岐点になるものと思われることから、いよいよ狭山再審闘争は、最後の土壇場にきたといえます。なにとぞ一層の御支援下さいませ。ではわたくしのごあいさつにかえさせていただきます。ありがとうございます。

一・二八狭山再審闘争勝利・事実調べ要求中央決起集会に結集された皆様方へ

千葉刑務所在監 石川 一雄

(見出しは編集局)

体化させたもので、主として聖書からモチーフを得た世界であった。いわゆる抽象彫刻だが、一般にいわれるそれが、形態のアイデアが先行するの比して彼の創造は内部にある世界を具現化しようとする努力に向けられていたといつてよい。

しかし、一九六六年、三里塚芝山連合空港反対同盟の委員長となり、とくに六八年の第一次成田闘争以後は、闘争の激化とともに制作もおとろえず、三里

「反骨の創造」―戸村一作遺作展

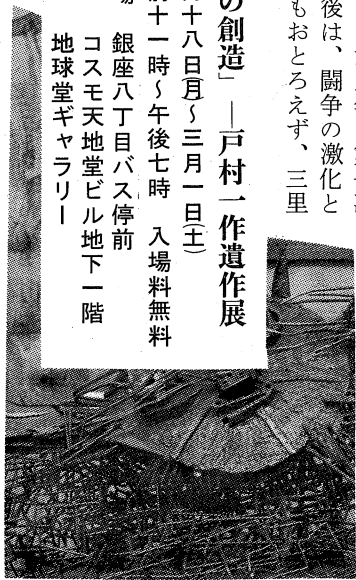
二月十八日(月)～三月一日(土)

午前十一時～午後七時 入場料無料

会場 銀座八丁目バス停前

コスモ天地堂ビル地下一階

地球堂ギャラリー



塚の闘いを果敢にモチーフにしてゆく。しかも、今回、展示される「闘う大木よね」などに強くあらわれているように、具体的事実の表現として凝固昇華させるリズムが、刻々と強化されてゆく。その年毎の切迫した自己変革の過程は劇的でさえある。「70年に向けて」という作品は、まさに怒りの鉄パイプの集団が、来るべき空に向けて、斜めにするどく集束し、また農民が日常使うフォークや鎌、農耕具の部品などが、ふんだんに使われてくる。六八年からの十年間の作品は、主に団体展に出品されて、そのサロンの内部に居坐って、時ならぬ罵倒を放ちつづけていた訳だが、多くの人の眼に触れる機会はずしも持たなかった。今回、はじめてそのラディカルな創造の一端を垣間みる機会ができたのだが、世界の変革と自己の変革という苛責ない両車輪の衝突を、戸村一作の世界はみせてくれるにちがいない。現在確認されている三十点近い彫刻のうち八点ほどと、油彩、スケッチ四十点ほどの展覧会だが、日本の階級闘争、解放闘争史上、重要な三里塚の闘いが、個人の内的営為と表現行為をどう変えていったか、そしてそれが、やがては書き変えられなければならない日本の美術史のなかで、どのようにとらえられてゆくか興味深い。

十年連続で学費を値上げしてきた。全治一ヵ月など十数名が負傷する十二月十三日、「学費値上げに反対する会」を先頭に一千名の学友が学内集会、デモに立ちあがった。学生の怒りがついに爆発したのだ。たたいは更に十四日、十日と続く。

血迷った当局は、この全く正当な学友たちの声に耳を傾けることなく、白色テロをかけてきた。学

中大学費値上げ阻止

検問、逮捕に屈せず闘いぬく

八〇クラスに及ぶ値上げ反対決議を圧殺し、試験強行で二年連続の値上げをもちろむ中央大学において、創意あるたたかいが展開された。一月十日、学生たちはサクをの



るねらい打ち的いやがらせや、農作業を終え帰ろうとする耕運機にブロックを投げつけるなど、許しがたいテロ行為、どう喝におよんでいる。

《八〇年、緒戦の大勝利をかちとる》

りこえ、あるいは付近の山からトランシーバーを持った職員の間をぬってキャンパスにだれこむ。試験がある者は、セーターの下にビラをかくして検問をくぐりぬけ、試験場で公然とビラを配りだす。だが、こうして当然の権利を行使した学生を待っていたのは、数十名の教職員による暴行であり、学外への強制退去であった。サークル棟も一方的に封鎖され、ビラ配りを禁ずる告示すらだされた。さらに一六日には、検問の前でビラを配っていた学生が、公妨、道交法違反、威力業務妨害等の理由でデッチあげ逮捕されるという暴挙までおこった。

「とうちゃん、かあちゃん！空港のためにみんなの気持ちをバババにされてしまったこの町を、轟音なりひびくこの町を子供たちに手渡せませんか！」「反対同盟の宣伝カーは部落から部落へかけめぐる。」

宣伝隊は怒りの深さをつかみとってくる。空港の足もとで廃港への確かなうねりが生まれているのだ。《強まる反対同盟 切りくずし策動》

しかし反対同盟・支援の強固な団結は、あらゆる敵対をはねのけ町議選の勝利へバク進する。昨年春成田市議選勝利の成果をひきつぐ、反対同盟の大攻勢の中で他候補は戦々恐々とし、町長十一人衆と呼ばれ、常に町政を牛耳らんとしてきた悪質賛成派議員はついに恐れをなして立候補をとり下げてしまった。二〇名の無投票当選が決ったのである。

一連の弾圧で試験は次々と強行されたが、学生の怒りの声は高まりつつある。機動隊・暴力職員に対して「カエレ！カエレ！」のコールがまきおこり、多くのクラスで、学内外で討論がちとられ、団結の輪は広がりを見せている。

1月16日、反対同盟はきたる2月3日公示の芝山町議選への取りくみを決定した。石井英祐さん(辺田)、石毛博道さん(中郷・青行)相川勝重さん(浅川・青行)の三名の候補を三者一体のものとし、団結を強め、連日連日闘争の一環としてたたかいはじめた。

「二期はもうできる。そうすればここいらには住めなくなつて土地を公団に売ろうと思つても成田用水を引いていないと、公団は買い取ってくれない」(?!)

「公団一町長派の対立候補をひっこめざるを得ないところまで追いこんだんだ！この間われわれがつみ上げてきたものは票という数にこそ出ないが、必ずりっぱに実を結ぶだろう！」(石毛博道氏)

差別選別教育の強化、戦争策動の一環としての教育再編の本質をみぬき、大学の管理支配体制を突破して闘おう。若い力をあますところなく爆発させ、全国各学園で創意あふれる闘いを展開しよう！ともに！

「開港後、ビニールハウスや窓ガラスが排気ガスで黒くよごれる！」(高田)、「ゼンソクの子供がひどくなって寝込んでしまった」(牧野)、「防音たつて大金かけて五ホーンも違わない、ウソッパチだ！」(小池)、「京成線延長したところで空港がある限り生活はよくならないわよ。国もごまかそうとしているのめえすいているよね」(新井田)。全地域に散らばった

原野をひとクワひとクワ掘りおこした。空港建設が突然決つたのは「やつと人間らしい生活にはいった矢先だった」と言う。二十年の開拓の労苦が源さんの闘いを決めた。「いくら札束をつままれても土地は売れない。おやじが苦労したことが、金のために子供の兄弟げんかになる。この土地を子孫に伝える義務がある」。土に生きてきた農民の固い信念が脈うつ。

一昨年、横堀要塞で逮捕された。取り調べはきつかった。朝九時から夜の九時まで続いた。検事は「いい条件をとって国に御奉公しろ」と言った。「警察と公団はぐるだ」と思った。

用地内農民の横顔

農地を要塞として闘う

木の根 小川源さん

なみたいていの苦労ではなかった」と語る。トンビグワ一丁で

反対闘争の「首石」として

天神峰 小川喜平さん

三里塚闘争を知る人で、「木の根の源さん」を知らないものはない。源さんのトレードマークの白髪は、十四年の闘いの中でひとときわ目をひくものである。「三日間戦争」といわれる強制測量クイ打ち阻止の闘いでは、頭からクソをかぶって公団職員につかみかかり、クソの源さん、異名をとった。第二次代執行の際には、地下要塞の穴の中で一晩がんばった。そして横堀要塞戦、その「武勇伝」はそのままた三里塚闘争の歴史である。

喜平さんは、戦後、小川の本家から分家した。したがって小川喜平さんとは兄弟である。「お互いになんこもんだ」というが、そこには血のつながり以上の信頼感がたがた。

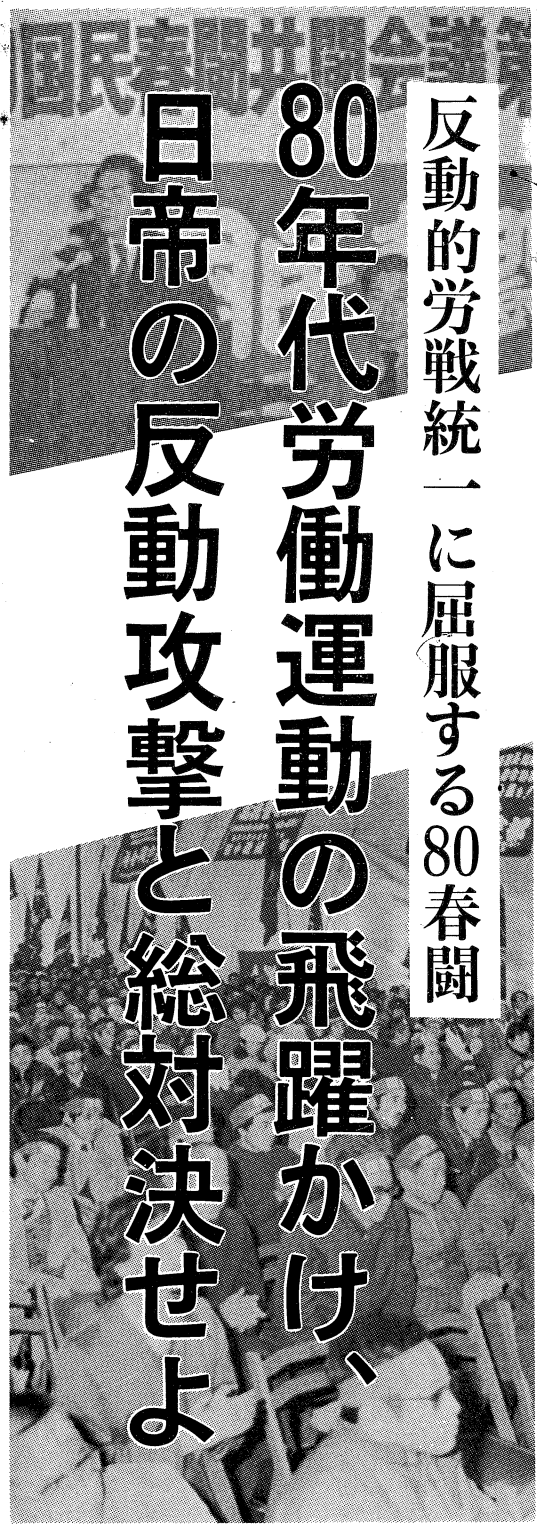
と強い正義感に燃えて語る。また、年賀状や「お中元」などあらゆる機会をとらえて接触しようとする公団の執拗な工作を、その都度きっぱりとはねつけてきた。「公団の連中に甘くみられちゃならない」と、がんこもんの一面をのぞかせる。

で生きていくということだ。農家で生まれ育った農民の心根が伝わってくる。「自分も本家も、しゃべることはいまあまりうまくないから、演説することは他の人にまかせて、自分(おやいし)になる」と言う。「首石」とは聖書の言葉である。三里塚闘争十四年を支えてきた一つの農民の闘魂である。



10万署名の成果をひきつぎ

5・20大決起を！



反動的労戦統一に屈服する80春闘

80年代労働運動の飛躍かけ、日帝の反動攻撃と総対決せよ

八〇年春闘を前にして、労働戦線における反動的統一が急ピッチで画策されている。

同盟・JICによる右からの揺さぶりに浮き足だった総評・民同は、展望を喪失しているがゆえにこの労戦統一にとびつき、バスに乗りおくれまいと右への道をひた走りはじめた。

イランを先頭にした石油戦略の第二の発動により、帝国主義による世界支配と資本主義体制そのものの根底を激しく揺り動かされた資本家階級は、八〇年代における体制的延命をかけた全社会的規模における再編成をもくろんでいる。大平をして「脱出のメドがまったくたない」と言わしめるほど、帝国主義の支配は未曾有の危機に直面しているのである。したがって、労働の反動的統一の画策は、日帝ブルジョアジーの八〇年代危機のりきり

策として、侵略反革命体制づくりの重要な柱としてある。

敵の攻撃がこのようなものとしてある以上、これと闘う側において中途半端な撰択は許されなくなっている。「革新」がもはや革新として存在することができない情勢、資本との全面対決を準備するのか、武装解除して資本にひれふし、体制維持に加担するのかの決断を根本的に迫る情勢が到来しているのだ。

すでに既成指導部は総体として資本の軍門に下らんとしている。八〇年春闘における革命的労働者の任務は、この反動的労戦統一に抗し、侵略反革命と対決する労働運動の革命的推進をめざし奮闘しぬくことであり、帝国主義支配の危機をさらに拡大させるべく全労働者の戦闘的決起を創出することである。

戦争への道をきりひらく労戦統一に抗し、職場・地域からの反撃かちとれ!

八〇年春闘の大きな特徴は、とりわけ社会党・総評・民同指導部が、JICをばねとする帝国主義的労働運動がおし進める「労戦統一」に屈服し、帝国主義ブルジョアジーとの協調の道を公然と歩みはじめた点にある。

労戦統一への布石としての八%賃上げへのおさえこみ、ストの回避は端的にそれを表現しており、社会党の社公民路線への転換はさびにそのことを確認させるものとなっている。

日経連「賃上げ自粛論」にたたかわずして屈服した八〇春闘方針

七四春闘をピークにして、以降、連戦連敗をくり返してきた春闘は、八〇春闘においてもすでにその敗北を前提としておし流されんとしている。

昨七九春闘では、これまでの春闘方式がくずれ、統一したガイドラインが出せないままばらばらな賃上げ方針がでた。今春闘においては、JICがうち出した八%要求に対して、同盟はもとより、総評も「最低限八%」とい

いなして何とかその違いをうち出そうとしながら、このJICのガイドラインに要求を合わせた。この八%要求決定にさいして、IMF・JICが重要な役割を果たしたことは言うまでもない。七〇年代後半「JIC集中決着」を通じて春闘相場形成を担ってきたJICは、今回においても、労戦統一をにらみながら、ブルジョアジーの「賃金自粛」論を忠実に実行している。たしかに消費者物価の七九年度平均上昇率

は五%前後であるが、昨年度後半からは、卸売物価が一七%を越え、公共料金の値上げをふくめ消費者物価の上昇は必至とみられ、要求額である八%を越すであろうことは、いかに政府が政策的に物価指数を操作したところで止めることはできない。かてて加えて、「減量経営」の結果としての「減収増益」は、昨年度上半期の決算でも二〇%増である。このような状況下での低額要求は、ブルジョアジーをしておおむね満足させるものとなっている。

日経連「労働問題研究委員会報告」は、「わが国の春季賃金交渉は、昭和五一年以来四年連続一ケタ妥結となっており、低成長下での賃金決定のあるべき方向を示してきている」と高らかに勝利宣言をなし、ストライキの減少をもたえている。

労資協調と人民への犠牲の転嫁によって危機のりきりをはかる日帝ブルジョアジ

そして七三年オイルショック以来の高インフレに対して「労使が協力して、血みどろの努力を傾けてきたことよって、いまようやく克服した」のであり、「第二次石油値上げに對し、「海外要因にもとづく消費者物価上昇分を賃上げで補填する」ということがないようにならなければならない」と賃金の自粛を訴え「さもなければコスト・プッシュ・インフレになり「消費者物価上昇分は国民経済全体で負担すべき」だと労働者におどしをかけているのである。

首切り合理化、石油値上げ分の価格への転化によって増益をつくり出し出てきた資本が、今またその犠牲の一切を人民に転嫁し、インフレに対しては「国民経済全体」で負担しろというのである。すなわち公共料金の値上げ、公務員の合理化等によって財政危機に対処し、土地政策、農産物価格によって物価を安定させ、賃上げ自粛すればインフレはおさまるとまことに資本に都合の良いことをならべてているのである。

だがそれ以上に問題なのは、「資源の値上げは賃上げ要因にするな」という日経連の主張に對し、「無視できない」こととして「実質生活向上分はせいぜい一〜二%どまり」鉄鋼労連・中村委員長」としてうち出した八%要求に對して、国民春闘共闘会議もこれに追隨したことである。

春闘の質的転換を強調し、「実質賃金の防衛」の名の下に八%要求は絶対によずれないと力んでみても、JICのうち出したこの八%ガイドラインを「賃上げと日本経済との総合性をもっとも重視している」と日経連が高く評価しているのを見てもわかるように、「賃上げ自粛」論にあらかじめ屈服したものでしかないのである。

そして、このJIC八%要求への追隨は、労働者階級への犠牲の転嫁を総評・民同指導部自身が容認し、JIC主導の春闘に屈服し(ストなし短期決戦・終拾、帝国主義労働運動への道を歩むもの以外ではないのだ。

では、このような屈服と敗北を重ねてもなお、総評指導部の労戦統一の追求、要求額的一致をテコに「統一」への布石をうつことによつておし進めんとする労戦統一なるものが、労働者階級の未来をつくり出すものであるのか、といえ、まったく正反対のことしか生み出さざるをえない。

労働運動そのものを帝国主義支配体制に組みこまんとする労戦統一の反動的もくろみ

労戦統一が、労働者階級の下からの切実な要求によつて掲げられたものではなく、ブルジョアジーにとって重要な課題となっていること、このことをわれわれは絶対見のがしてはならない。

歴史的に見ても、労戦統一の名の下に戦前においては、一九三〇年代、満州への日帝の侵略を突破口として、「日本労働俱樂部」から「日本労働組合会議」の結成を通し「産業報国会」への道を切り開いた。戦後においては、朝鮮戦争を目前にして、産別会議の解体から民同・総同盟による総評への統一へ至った。いずれも、左翼的労働組合の解体を通し

て右派の結合がはかられたものであり、一貫してブルジョア階級の強力なテコ入れのもとにおこなわれてきたのである。

総評が「ニワトリからアヒル」へ急転回し、資本の意にそわなくなったときに、日帝・資本の意をうけて分裂した同盟・JCは、戦闘的労働組合の破壊に手をかしてきた。

それが七〇年代に入り、全通宝樹をはじめ総評民同の右傾化が強まる中で、うち出されてきたのが、今回の労働統一である。

したがって、この労働統一なるものが、日帝の八〇年代戦略の重要な柱としてうち出されていることを、われわれは第一にみておかなければならない。

ブルジョア階級にとって、八〇年代延命の必須の条件として侵略反革命へ向けた国民統合の柱として労働運動の体制内化をもくろんでくる。六〇年代を通じてJC・同盟の育成をはかってきた資本は、その最終的なターゲットを総評にしぼり、総評の戦闘性の解体に乗り出したというのであり、そのような見通しがついたものとして「統一」への強力なバックアップをはかっているのである。

第二に、この労働統一なるものが、労働官僚どもの保身として役立っても、労働者人民の利害を何ら守るものではないということである。

「統一」することによって何がちとれるのか、このことについて「統一」を唱える部分ですら明らかではない。賃上げ自衛隊を公然とかがける組合、資本の延命のために「指名解雇」を認める労組との全的統一による、といったいいいなる成果が得られるのか。このような下部の労働者の当然の疑問に対して、指導部

既成労働運動をつき破り、日帝の80年代代戦略に対決する労働者の決起かちとれ

七〇年代を通じて帝国主義世界支配が後退を重ね、体制的危機が顕在化したことに対して、日帝は、戦後つくりあげられたいわゆる五五年体制の全面的再編を完成させんとしている。

今年三月リムパックへの自衛隊の参加にみられるように、日米安保体制を日米共同した戦争体制へと確立するための画策、その頂点としての「自衛隊」認知と海外派兵、自民党政府の独占支配の崩壊にかわる多党化に対応して中間政党的育成を通じた議会議事政治の「安定化」と空洞化、日帝資本の延命をはかる産業構造の再編と既成労働運動の解体再編を通じてより強力な独占資本の育成、そして、国民統合の基軸としての帝国主義天皇制攻撃、このあたりに軍事・政治・経済にわたる全社会的再編を完成させることによって、八〇年代アジア侵略反革命・環太平洋圏への乗り出し、資源確保に向けて大々的な帝国主義的野望を実現せんとしている。

この日帝八〇年代侵略反革命を支える重要な柱として労働運動の体制内化がもくろまれているのである。そして、戦後民主主義に依拠して「革新」の旗をかかげてきた既成の左翼は、この根本的転換期に際し、出口をなくしている。

生活と権利の防衛が「反戦・平和」が資本と支配階級に対する有効な武器たりえた条件が喪失した現在、帝国主義支配の危機に直面して既成労働運動の指導部はなだれをうって資本の軍門に下らんとしている。社会党は「安保容認」をテコに右へとカジをとりなおし

は何ら慮ることができない。

総評指導部は、このまま小さくなってしまつては自己の位置がなくなる、パスに乗り遅れてしまつてしまうという「危機感」はあつても、労働運動の資本への屈服を突破しなければならぬという危機感もあわせていない。

同盟・天池などは「はつきり」と、労働組合主義に「ついて」共産主義運動に対抗するもの」と説明して、帝国主義労働運動に向けた統一であることを公然と語っているのに、総評・富塚は「表現の問題より、いまの労働運動とは何かを詰めていけば合意は可能」として、資本への屈服の道を歩む姿勢をみせているのだ。

そして、既成指導部の唯一の展望が、政策・制度要求—そのための政党再編成にあることをみてとると、社公民路線へと結実化した今日の既成指導部の最終的破産は全面的に開花したといわねばならない。

第三に、「統一」なるものが、右派の大連合を一つの極にしつつ、その対極に革命的戦闘的労働者の解体、切りすてをその本質としてもつていようことをみなければならぬ。統一なる言葉のかけで、徹底した反共主義が貫かれてきたことは、すべての労働統一の歴史の中でみられている。だが、左翼の徹底した排除にとどまらず、資本の首切り攻撃、破産攻撃と対決している労働者の切り捨て、中小未組織の切り捨てに至ることははや明らかである。

資本に敵対するもの、労資協調の敵対者は一切認めないということが「労働統一」の本質であり、また、そうした戦闘的労働者の排除ぬきには「労働統一」もありえないのだ。

八〇年代をたたく革命左翼、戦闘的労働者の任務はますます重要なものとなつていく。日帝ブルジョア階級は、資本主義の危機を自ら公然と認めるところまで、その危機感をつのらせている。六〇—七〇年代を通じて作りあげた支配体制の根本的再編成をなしとげる以外にブルジョア支配を維持しえなくなつていようのである。

したがって、われわれのたたかいは、この日帝の危機のりきり策としての戦争と差別の道に根本的に対決するものとしてたたかわれねばならない。

土国益・国防論の鼓吹、資源・エネルギー危機のりきりのための「労資協調」のキャパシティーは、労働者階級の階級的背骨を打ち砕き、反革命国民統合をもつての挙国一致とアジア侵略反革命の全面的貫徹を準備せんとするものである。六〇年代春闘の中で、ブルジョア階級が狙っていたことは、賃金アップと交換に合理化をすすめる、この労働者の階級性を解体するところにあつた。反動的労働統一のもくろみは、このブルジョア階級の狙いに徹底して奉仕するものなのだ。労働運動を資本と非階級的に敵対するものから協調するものへと、侵略反革命と体制支配の道具へと組みこもうとするものなのだ。

このような日帝の策謀を見すえ、これとの全面的対決を準備する以外に労働者階級の勝利はありえない。

われわれがたたかうべき第一の任務はリムパックを通じた自衛隊の海外派兵、アジア侵略反革命戦争に断固対決し、決起することである。

韓国民衆決起、中東人民の決起に対処し、ソ連のアフガン侵攻を口実にしたソソ包囲網をつくりあげようとするこのリムパックへの自衛隊の参加を許してはならない。

安保・防衛問題では選挙に勝てない、国防はやむをえないとして、帝国主義軍隊としての自衛隊、アジア侵略反革命の要としての安保との対決から目をそらすことは許されない。

日帝の軍備と戦争が、決して人民を守るものではなく、アジア・中東における資本の権益を守り、アジア人民の解放を弾圧するものでしかないことは明らかではないか。われわれは、「違憲違法」論からたたかうのではなく（ブルジョア階級はいつでも「法」の名の下に違法を重ねてきた）、第三世界人民、アジアの被抑圧民族人民の利害を守り抜くものとして、帝国主義者の敗北を自己の利害とする立場によって、このリムパック反対のたたかいをうち抜かなければならない。このような思想性のもとに安保闘争をたたかうことをぬきにしては、プロレタリア階級の真の戦闘性を

つくり出すことはできない。

第二に、権力の国内人民分断、差別・抑圧攻撃とたたかう人民の利害を守り、その先頭に立つてたたかう労働者の潮流を作り出さねばならない。

本工労働運動こそが「本来の戦線」であり、階級闘争だといふ純プロレタリア的労働運動は、資本の人民分断攻撃に手をかすばかりか、危機の時代にはその破産がますます明らかになる。「弱者救済」国民春闘のスローガンすら投げすててしまったではないか。

もっとも抑圧され差別される存在としての部落大衆、「障害者」、在日朝鮮人民、膨大な未組織労働者の利害を自己の階級的利害としてうちすえ、被差別大衆のたたかいに応える道こそ革命的労働運動を復権させるのだ。

われわれは、狭山闘争をたたかう中で、純プロレタリアの克服をめざし、部落大衆の革命的魂にふれ、これに学びたたかひいてきた。三里塚軍事空港を粉砕し、巨大な敵国家権力と暴力装置機動隊との実力対決を、十五年にわたったたたかひが続けてきた三里塚農民の戦闘精神に込められた労働連帯をめざしてたたかひぬいてきた。狭山・三里塚闘争は八〇年代においてますます労働者人民の革命的エネルギーを呼びさますものとなるだろう。

全国にまきおこる反差別闘争、地域住民闘争は、敵に対してのみならず、労働者階級にするどい刃をつきつけたのである。今こそ労働組合主義的枠をつき破り、血債・猛省の思想にうらうちされた労働者の決起をうちたてねばならない。そして狭山・三里塚闘争への決起と歴史的勝利の獲得こそは、そのことを実践的に示しぬく八〇年代における最重要の課題といわねばならない。

首切り・合理化うちやぶり、戦闘的労働者の力で資本に総反撃せよ！

第三の任務は、吹き荒れる資本の首切り合理化攻撃、戦闘的労働運動の破壊に抗してたたかう労働者を守りぬき、労働の反動的統一に総反撃しなければならぬ。

(五頁へ続く)